シンポジウム

「19 世紀から 20 世紀初頭のフランスにおける舞台舞踊の多様なあり方」

19 世紀におけるフランスは国内での舞踊のあり方の変化と多様化、国外の未知の踊りとの出会いを経験し、20 世紀初頭においてはモダンダンスの台頭に見られるような変革期を迎えた。本シンポジウムでは、パフォーマンスとして上演される舞踊（舞台舞踊）に注目し、舞台舞踊に向けられるまなざしや舞踊自体のあり方の多様さを検討することを目標に掲げた。

シンポジウムはオンラインで開催された。丹羽晶子、渡辺采香、佐藤真知子（発表順）ら 3 名による発表が行われ、1840 年代のフランス国内における女性に提示されたバレエや女性ダンサーの表象、エジプトを訪れたフランス人が抱いた現地のダンスに対するまなざし、モダンダンスの一形態であるプラスティック舞踊の両大戦間期におけるあり方について論じられた。視聴者も交えてのディスカッションと質疑応答では活発に意見が交わされ、舞台舞踊のあり方をさまざまな視点からとらえる機会となった。

1840 年代の女性向けモード誌におけるバレエ表象

—モード誌 *La Sylphide* を中心に

丹　羽　晶　子

本発表では、19 世紀フランスで刊行された女性向けモード誌 *La Sylphide*（以下、『シルフィード誌』）に掲載された 1840 年代のバレエ批評文（以下、バレエ評）を通して、読者の女性に向けたバレエや女性ダンサー表象について報告した。

19 世紀フランスのバレエは、「女性について女性が演じる男性のための芸術」という記述にあるように、女性ダンサーが活躍する一方で、作り手や観客の多くは男性であった。当時の女性作家によるバレエ批評や手記はほとんど見当らないが、女性向けに刊行された『シルフィード誌』には、定期的な

バレエ評が確認され、女性に向けて「男性のための芸術」がどのように届けられていたのかを知る手がかりとして着目される。研究対象とした『シルフィード誌』は 1840 年に創刊され、雑誌の購読料より、購読者層は、主に高所得層のブルジョワ階級の女性たちであると推察される。そこに掲載されたバレエ評の執筆者は男性であった。

本発表では、『シルフィード誌』における女性ダンサーの表象の特徴を捉えるために、①初演バレエ評における主役女性ダンサーの描写内容、②女性ダンサーのデビュー評における描写内容、③女性ダンサーの官能性に関する描写の 3 点を、読者を女性と限っていない他紙（『プレス紙』、『デバ紙』、『メネストレル誌』、『ラ・モード誌』）と比較検討した。

①初演バレエ評における主役女性ダンサーの描写については、役柄に依拠した描写であったことが確認された。一方で、他紙の初演バレエ評においては、役柄に依拠した描写以外に、女性ダンサー自身の踊りやその特徴についての描写が確認された。

②女性ダンサーのデビュー評における描写内容は、女性ダンサー自身の描写が中心であった。特に『シルフィード誌』においては、女性ダンサーの容貌、身体的特徴、技術、表現力への言及に加え、女性ダンサーの優雅さへの評価が散見され、特に重視された項目であることが確認された。他紙で言及されたような女性ダンサーのポアント技術やステップの正確さ等の高い踊りの技術よりも、女性ダンサーの衣装や見た目、立ち振る舞いの優雅さを重視するという『シルフィード誌』の傾向は、女性読者に対してバレエが、卓越した技術を披露する見世物ではないことを示していると捉えられる。当時の美の規範の詰まったモード誌において描写された優雅さを備えた女性ダンサー像は、読者の女性に向けて提示された美の規範として表象されており、この点は、女性向けモード誌独自の視点であり、女性読者を想定した男性批評家の意図の現れとして筆者は考察する。

③女性ダンサーの官能性に関する描写について、天上的と形容される女性ダンサーが同時に内包している官能的で異国的な女性像は、他紙では詳細に描写され賛辞が確認された。一方で、『シルフィード誌』では、そのような女性像に対して消極的で時には辛辣な評が確認された。ここから、当時の批評家らは社会におけるジェンダー規範に反しないよう、女性読者が受け止めるべき女性ダンサー像を、バレエ評を通して意図的に提示していた可能性が考察された。

エジプト文化誌におけるアルメの記述

渡　辺　采　香

本発表では、エジプトの女性ダンサーに関する記述を例に、19 世紀フランスにおいてヨーロッパ外の未知の舞踊がどのように受け止められたのかを考察した。

当時、エジプトの女性ダンサーは「アルメ」（almée）と呼ばれ、作家、画家、舞踊家をはじめとして多くの分野の芸術家たちのオリエントに対する想像力を刺激した。エジプトに滞在したフランス人による同時代の現地の文化の記述は彼らにとって貴重な資料となった。今回の発表では、文化を包括的に記述した書籍の中でとりわけ影響が大きいと考えられる、19 世紀前半に出版された 2 点をとりあげた。音楽家ギヨーム＝アンドレ・ヴィヨトー（1759-1839）が現地の音楽や舞踊について解説した『エジプト誌』（*Description de l'Égypte*, 1809-1822）、エジプトで医師として活躍したクロ・ベイ（1793-1868）による『エジプト概観』（*Aperçu général sur l'Égypte*, 1840）である。

異なる筆者によるエジプトの踊りについての記述の分析にあたり、本発表では 2 つの共通点に注目した。まず、オリエントの舞踊に対するヨーロッパの舞踊の優越性が強調されている点である。2 つの資料では、踊りの客観的解説だけではなく、筆者の価値判断も伝えていた。ヨーロッパの踊りには洗練、連続性、躍動感が、オリエントの踊りには即物性、官能性、単調さが割り当てられているが、後者が持つ特徴、すなわち自文化の踊りとの相違点には否定的な価値が付与されている。また、アルメの複数の演目のなかでも、動きそのものを主題とする踊りよりも物語性のある踊りに高い価値を与える傾向も一致していた。この視点は、19 世紀前半のフランスにおいて表現的舞踊がより高く評価されていたことの影響を受けていると考えられる。以上のように、未知の踊りの記述は自文化の踊りとの比較によって行われたが、同時に異文化の踊りに対する否定的価値の付与もなされていたことが確認できた。

フランスでは、19 世紀から今日まで神聖さと猥雑さという対極のイメージがオリエントの踊りに付与されてきた[1)]。本発表で扱った 19 世紀前半の記述におけるアルメの踊りは性的魅力を過度に強調し、繊細さや深みに欠けると評価されており、先行研究で指摘されるオリエントの踊りに対する否定的イメージに一致するものである。一方で、ロマン主義の影響下にある作品でなされているような古代世界への憧憬の投影やアルメの神聖視など、肯定的評価は確認することができなかった。ロマン主義的アルメが登場する作品群と今回扱ったような文化の記述の関わりについては、今後より詳しく検証し、明らかにしていきたい。

注

1） Anne-Laure Garrec, « Les danses ‘orientales’ en France du XIXe siècle à nos jours: histoire d'images, regards d'histoire », *Les Cahiers de l'École du Louvre*, 2012.

1930 年代フランス舞踊界における plastique 概念の広がり

佐　藤　真知子

本発表では、戦間期のパリでモダンダンスがどのような状況にあったのかを、この舞踊形態の一種である「プラスティック舞踊 danse plastique」に焦点を当て検討した。

舞踊芸術史において、20 世紀初頭に台頭したモダンダンスは、舞台芸術に大きな変革をもたらした。モダンダンスとは、それまで支配的であったバレエとは異なる、新しい舞踊形態の総称である。この舞踊形態は、イザドラ・ダンカンの自由舞踊をひとつのきっかけとして広がった。先行研究によれば、フランスでは象徴的なモダンダンスの舞踊家が知られていないことから、最終的にモダンダンスは根付かなかったという説がある。むしろフランスはモダンダンスではくバレエをとり、それが覇権的な力を持つようになったとする研究もある。

本発表では、戦間期に設立された国際ダンスアーカイヴ（Les Archives

internationales de la danse: AID）が開催したカンファレンス・デモンストレーション「舞踊の技術」（1935 年）をとりあげ、当時のパリの舞踊潮流の実態について把握することを試みた。この催しは、この時期のパリに実在した、フランスと諸外国にルーツのある様々な舞踊学校の代表者全員が招待され、それぞれの教育システムの理論と実践について発表がなされたと謳われているからだ。この催しについて解説した AID 発行雑誌の分析を通して、以下のことを指摘した。

（1）プラスティック舞踊はこれまで、古代ギリシアを志向したダンカンの舞踊と直接関連する一派と考えられてきた。本催しでもこの舞踊形態は、古代ギリシア美術との関連で語られていると同時に、広く認知され実践されている。

（2）モダンダンスとバレエには折衷的傾向がみられ、「プラスティック・バレエ」なる舞踊流派も存在している。

（3）1920 年代ロシアで政府によって規制されたプラスティック舞踊の実演家が、パリに拠点を移して活動を継続している。

（4）芸術志向というよりも、豊かな人間形成を目的としたアマチュア・ダンスの興隆がある。

このように 1935 年当時のパリでは、プラスティック舞踊の広がりが確認できる。ほかにも、音楽的、表現的、体操的といった多くのモダンダンスの諸流派があったことが確認され、パリの舞踊潮流は勢いをもっている。総括的にみて、バレエが覇権的な力を持ち、舞踊界を統括している状況になっているようには思われない。しかしモダンダンスは誰かに見せるというよりも、主観的に体験されることが重要視されており、人格形成とみなす舞踊教師が多かった。それゆえ戦間期パリにおいてモダンダンスは、芸術的というよりも社会的な意義づけのなかで、個人的身体を解放するものとして広く実践されていたと考えられる。純粋に自己目的的な舞踊観、あるいは人間性を創造の原点におく身体観の広がりがあることが指摘できる。